

学 位 論 文 要 旨

氏 名 岡村幸代

題 目 子育て意識の変容過程に基づく母親支援の実践開発

地域社会の繋がりの希薄化や母親の孤立等、子育てに関わる困難な状態が続いている今、具体的な取組の手順やモデルの共有、支援の質的向上と量的拡充の推進が望まれている。これまでに、母親への支援の実践自体は豊富にあるが、それらの効果に対し十分な調査や分析はなされていない。分析を踏まえた実証的かつ実践的な支援プログラムを開発し、支援の強化に繋げることは喫緊の課題である。そこで本研究では、公民館における子育て支援講座（以下、講座）に継続的に参加した母親の語りについて、量的分析及び質的分析を行い、母親の心理的変容の特徴に基づく効果的な支援方法の端緒を得るとともに、講座での絵本の読み聞かせ（以下、読み聞かせ）に着目し、活動前後の母親の気分や感情の変化を量的分析により実証する。それらを踏まえ、読み聞かせを援用した子育て意識の変容を促進する支援プログラムを開発し検証する。その際、育児に対する自己効力感の向上等を、統制群との比較による検討、及び母親の個人差による効果の違いに注目して検討する。また、支援プログラムを介した母親の心理的変容の過程を提示する。

本研究全体は、4章構成である。第1章は先ず、研究の背景を述べ、読み聞かせ活動と内外の支援プログラムに関わる先行研究の今日的な課題を示した。次に、本研究全体に関わる倫理的配慮について記した。さらに、本研究の全体像と母親の子育て意識の変容及び読み聞かせ活動と関連要因との関係を示した。本研究では、講座に参加した母親の子育て意識の変容として、育児に対する自己効力感の向上と読み聞かせ活動に着目した。母親が読み聞かせやワークに取り組み、子育て意識の変容を促進する支援プログラムを開発し試行するという、本研究の全体構成を説明した。

第2章は、講座に継続参加した母親の子育て意識の変容に着目した。併せて、子育て意識の変容過程の促進の要因を明らかにし、支援プログラム実施の具体的な手立てを考察した。第1節では、講座の参加初期における母親の子育て意識の変容過程を質的分析（複線径路・等至性モデル）により分析した。これにより、母親の子育て意識が4つの段階を経て変容することが示され、母親自身の講座における体験の類型の存在が実証された。第2節では、講座に長期間参加した母親の子育て意識の変容過程を複線径路・等至性モデルにより分析し、支援の実践に際して、母親の成長に促進的な働き掛けが出来る手立てを考察した。第3節では、講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴について量的分析（テキストマイニング、階層的クラスタ分析）を試みた。分析の結果、母親の心理的変容の時期や、変容に繋がる要因が明らかになり、支援の実践に向け端緒を得た。

第3章は、母親の子育て意識の変容過程に基づく支援プログラムを開発した。先ず、読み聞かせの母親に対する心理的効果を実証した。次に、認知行動論的技法を援用した支援プログラムを公民館の講座として開発及び実施し、評価を行った。具体的には、第1節では、講座での読み聞かせが、参加者としての母親に与える心理的効果を明らかにした。活動への参加を通して、母親のイメージ及び気分・感情の改善があることが実証された。第3節では、第2節で開発した支援プログラムの効果を統制群との比較において検証した。具体的には先ず、Ward法による階層的クラスタ分析を用い、母親の類型化を試みた。その結果、2つの類型（上昇群、維持・下降群）が見出された。次に、類型と諸変数との関係を検討した結果、上昇群の母親に育児に対する自己効力感の向上が認められ、第4回講座終了1か月後においてもその効果を維持出来ることが明示された。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し考察を加えるとともに、研究の到達点、今後の課題、及び今後の展望を提示した。第1節では、母親が他者に支えられながら講座への参加を継続する段階における支援に関し、子育てネットワークのエンパワーメントの過程や、家族療法における円環的な視点を援用し整理した。第2節では、支援プログラムの実施が子育て意識の変容過程に与える効果を検討した。具体的には先ず、第2章と第3章の結果を対応させ、支援プログラムにおける母親の子育て意識の変容を可視化しその内容を検証した。次に、得られた検証結果から、母親の子育て意識の変容のモデル図を提示した。第3節では、本研究で得られたその他の成果を整理した。さらに、本研究の今後の課題を示した上で、展望を論じた。